

都市に住まう文化とこれからの行方



谷 直樹

Naoki Tani

大阪くらしの今昔館
 (大阪市立住まいのミュージアム)館長
 大阪市立大学大学院教授



弘本 由香里

Yukari Hiromoto

大阪ガス エネルギー・文化研究所
 客員研究員

都市居住を歴史的にとらえる視点

弘本 先生のこれまでのお仕事をもとめられた著書『町に住まう知恵』を拝見して、改めて実感したのですが、歴史学の分野にしる、建

近世・近代から現代に至る過程で、都市居住のあり方はどのように変容してきたのだろうか。大阪や京都など、歴史ある都市の住まいの変遷や、その生活文化をふりかえることで、「都市に住む」ことの本質的な意味が見えてくるかもしれない。

現代の都市居住を考えると、あるいは都市における新しい居住文化を創造していく際に、歴史に学ぶべきものとは何か。蓄積された生活の知恵を現代的にどう捉え直し、町に残された歴史的なストックを今後どう活用していくのか。「大阪くらしの今昔館」の谷直樹館長にお話をうかがった。

築学や住居学の分野にしる、この本で示されたような社会システムを含めて通史として連続的に「居住」を見る視点が、これまであまり重要視されていなかったのではないかと思います。また、先述した大阪くらしの今昔館(大阪市立住まいのミュージアム)の計画から運営まで一貫してリードしてこられたわけですが、現代の住宅政策にアクトタイプに働きかける機能として、まちの住まいの歴史を扱うミュー

ジラムを位置付けるという視点は、他では見られない非常に画期的なものだと思います。まずはじめに、そういう視点を獲得されるようになった経緯からお尋ねしたいと思います。

谷 一九八九年に、『まちに住まう 大阪都市住宅史』という大部の本が大阪市から出ました。これは、私を含めた二十数人の専門家による共同研究をもとにしたものです。地方都市を対象とし、良好な居住環境をつくるうとするHOPE計画の流れの中で、大阪に蓄積されている歴史や文化をきちんと発掘することを目的に、三年ほどかけて進めました。この底に流れていたテーマが「都市居住」なんです。その頃は、都市は、仕事をするなり、学ぶなり、生産するところであり、住むための環境は郊外が優れているというところさえ強く、「職住分離」が進んでいました。

弘本 住宅双六という言葉に象徴されるように、都市に住むのは仮の住まいで、最終的には、郊外一戸建て住宅に行き着くという考え方がかなり一般的でしたね。バブル崩壊後の、いわゆる失われた十年を経て、今でこそ、都心回帰や都市再生に注目が集まってくるわけですが、大阪ではバブル期以前から「都市居住」に着目した政策に取り組んできたわけですね。国の住宅政策の流れの中で、地域性の視点が導入されたのがHOPE計画だったといってもいいわけですが、どちらかといえば地域の伝統的な建築技術や材料などが残っている地方で活発に取り組まれたもので、当時大阪のような大都市で展開されるというのは極めて珍しい例だったのではないのでしょうか。

谷 都市論の世界では、八〇年代終わり頃から、都市に住むことを考えないと都市自体が衰退していくと言われ始めました。梅棹忠夫さんの神殿都市論のように、情報などが集中すれば都市は成り立つという考え方もありますが、我々としては、都市はやはり住むところ。「職・住・遊」がキーワードで、そのストックが蓄積されているのが都市。きちんと都市を使いこなす、住みこなすことが大事と考えました。そういうことが共同研究の第一の理由です。

その前提として、大阪で住むことのルーツはどこにあるかについてずいぶん議論しました。建都千二百年の京都でも、都市居住の点

では、応仁の乱以降にいろいろな知恵が蓄積され成熟している。大阪は、豊臣秀吉の大阪築城が出発点ですが、その後「天下の台所」と言われた江戸時代に、都市に住むことの知恵が蓄積され、さまざまなシステムが仕上がってきたのが実態とされます。

弘本 都市文化の歴史的なルーツを「都市居住」として見ていくということですが、その際に大阪という都市だけに着目されるのではなく、比較文化的なアプローチで、京都や堺にも注目されて、「上方三都論」を展開されていますね。

谷 平安京の骨格をもつ京都市は、本来は為政者がつくった都市で、決して住みやすいとは言えません。それをヒューマンスケールの都市へと変えていったのは都市住民です。通りを挟んだ両側がひとつのコミュニティをもった両側町になりますが、これも当初からではなく、応仁の乱以降に生まれてくる。そして象徴的な出来事は、祇園祭を町衆たちが復興したことです。もともと祇園祭は官の祭りで、これを地元に住んでいる人たちが実態的に担っていくことになった。都市における町衆の動きが始まった独特の例だと思います。

弘本 政治的な中心性の問題ではなく、都市文化を庶民が支える、つまり「民」の力が勃興してくるとき、都市居住の文化が生まれると言ってもよいのでしょうか。

谷 都市には、「都」という政権の所在と、「市」という商業の中心の意味があります。天皇なり、大名なりが住むだけでも都市は成り立つかもしれませんが、住民がその中で生活し都市の活動を活性化させていくという意味から言えば、都市居住がないと都市の成熟は無理でしょう。

弘本 そうした視点から見ると、自由都市・堺のあり方は非常に興味深いですね。

谷 堺は、「都」ではなく、「市」ですね。国際貿易、国内貿易の結節点でした。強大な領主はおらず、町人の代表が自分たちの町をつくっていた。もともとは海辺の寒村で、まったくの新興都市、一種のニュータウンです。貿易の利便だけの味気ない都市ができたときに、武野燭や千利休などの堺衆が考えたのが、「市中の山居」です。自分たち

で生活環境を新しく創造していこうと、町家の裏庭に茶室をつくり、木を植え、自然を蘇らせた。田舎への憧れをもった独特の都市文化をつくりだしたわけです。

弘本 次の大阪には「都」としての政治性もあり、「市」もあつた。それを同時に実現しようとしたのが秀吉ということになります。

谷 秀吉は上町台地の北端に大阪城をつくります。当初は、それと堺をつなぐという壮大な都市計画でした。ところが、慶長の大地震で堺が壊滅してしまう。そこで今の川口あたりに港をつくり、船場付近の湿地を埋め立て、大阪の町を西方に延ばしました。その際、秀吉は、堺、平野、伏見の町人を大阪に移住させる。水運、海運に関わる商売感覚を持った人たちです。この秀吉の大阪城下は夏の陣で焼失しますが、復興した大阪は幕府直轄になる。その段階で町人中心の町になるわけです。そこに平野、堺、伏見の町人の遺伝子があり、これが大阪で成熟し花開いたのです。

「町式目」に認められた集住の知恵

谷 大阪の都市文化には、商人的な感覚が顕著に入ってきました。簡単に言えば、儲かってナンボということになりますが、実はこの金銭感覚というのは「近代性」なんです。大阪は、日本で最も早く、庶民も含めてそれがわかってきた都市。居住の面でも、当時は実に九割が借家人でした。借家という「裏長屋」のイメージですが、この町では借家人であることは恥ではない。大阪には「表長屋」があり、借家で商売もする。これは都市的だと思います。だから借家経営が流行る。井原西鶴も借家経営の極意を小説に書いています。

弘本 裏長屋から表長屋へのサクセスストーリーもあれば、その逆もあり得るわけですね。ある種のソーシャルミックスが居住システムによって実現されています。都市の流動性を受け止めながらコミュニティ

ティの健全性と活力を維持していくシステムとも言えそうですが、借家人と町内のコミュニティとの関係はどうでしょうか。

谷 京都などでは、町内会の正式の構成員は家持ちですが、大阪は早くから借家人も含めたコミュニティを成り立たせる努力をした。そうした町内の決めごとが、町の法律「式目」です。奈良や京都にもありますが、大阪のは条目数が京都の倍以上ある。しかも、いろいろな問題に対し、町内の人がどのように費用を分担するのかという計算法が書いてある。例えば橋の架け替えのとき、一番近い町内を一つすると、ひとつ離れた町内はその九割、次のところはその九割と一割ずつ下がる。捨て子や行き倒れが出たときも同様です。軒下に捨て子があると、「軒親」と言って、その家が養育義務を負う。自分の家で育てる場合もあるし、周辺の農村などに養子に出す。その持参金を準備し、奉行所に届けるのは町内の仕事。そのときに軒親の負担率や隣家や向かいの家の負担率も決められていました。

弘本 集住の知恵が練り上げられていたということですね。ある意味では、現代よりもずっと町の自治的な取り組みが進んでいて、防犯、防災、防火をはじめ、清掃、し尿処理、道路や橋の管理から職業規制まで、町内でマネジメントしていたということですが、町並み景観に関しても、町内で厳しい規制をしていたときがあります。

谷 ひとつは、奉行所からの規制があります。江戸時代の町家は中二階ですが、それは警沢禁止令によるものです。町人が住んでいる居住区は、ほっておくとだんだん警沢になってくる。そこを規制するわけですが、町人も表から見るところは従順、でも内側では警沢もした。ただし、町の式目では、「隣近所をよく見合つてやりなさい」となる。突飛な建物をつくと町内中が同罪になるから、互いに自己規制する。家を建て直すのに地盤を高くすると周囲が水はけで被害を受け、家並みも乱れる。だから高さは左右の家の真ん中にしなさいとなる。こうしたシステムには、いい面もあつたが一種の閉鎖性もあり、すべてを手放して評価すべきものではありません。ただ、これまであまりにないがしろにされてきたのも事実です。明治以降の、白

いカンバスに絵を描くような都市計画、自分が自立てばいいという建築設計。その意味で、日本の都市が国籍不明で、おもちゃ箱を引っ繰り返したような町並みになってしまったことを反省しなければいけないと思います。

「民」の文化から生まれた都市居住

谷 最近までの現代都市の問題点は、都市居住を考えなかったことです。そこに住んで仕事をしていれば、自分の町をきつと大事にする。景観問題にも敏感になるはずですが、近代以降、大阪や東京では都心の土地を投機の対象にしてしまい、都市居住が欠落することによって都市の衰退、荒廃が起こった。都心では、住民をサポートする利便施設もほとんど減少しました。そこに住むのなら、買い物をする場所や緑もほしいし、週末に開いている喫茶店もほしい。潤いがないとだめなんですね。最近では戦後の建物なども文化財になっていきますが、大阪には、ある意味でそうした都市のストック、遺産がまだある。それをどう磨いていくかが今後重要です。

弘本 今は、町中の古いビルや長屋などの活用例も増えていますね。自分仕様に使いこなすことがその醍醐味ではないかと思えます。長屋というと、近世から近代まで継承されたシステムに、室内の畳や建具を付けずに住戸を貸す「裸貸し」があります。他都市と比べても圧倒的に借家が普及していた大阪では、裸貸しのシステムも同時に発展していたわけですね。現代のスケルトン・インフィル・システムに通じる発想です。これは大阪的な合理主義に合うものですし、使いこなす文化だったのでは。

谷 借家人が畳や建具を用意する裸貸しは面白いシステムですね。大阪では戦前まで裸貸しが主流で、畳や建具を付ける「付け貸し」は少数派。畳や建具の交換性を前提としたこのシステムのおかげで、その背景に業者も生まれました。戸屋町があって障子、襖、欄間を生

産しました。建具の古道具屋もあり、質屋も兼ねる。引越して余分になれば預け、少し広めの家に移ると受け出す。こういうシステムが成り立っていた。それが変化した原因は職住分離です。特に近代になってサラリーマン層がたくさん出てきた。サラリーマンは転勤とか会社の都合で家を変える。布団だけですぐ住めることが要求された。そして、戦後の持ち家主義の中で姿を消していったんです。

弘本 今後、都市のストックを活用していく時代に、この裸貸し的な発想をうまく取り入れられたらと思うのですが。

谷 今、「古材バンク」というのがありますね。古い建物を潰す場合でも、もう二度と手に入らないような柱、格子、建具を取っておく。古い建物を修理する際に、それを交換していく。そうしたシステムを再評価して、流通をつくらないといけない。

弘本 新しい住まい手の中には、自分流の住み方をしたいという人も増えていきます。また、サラリーマンを中心とした標準家族の生活像では、住まい像が描けない時代になっています。さまざまな生活ニーズに応え得る柔軟なハードとソフトが求められていると思います。既築住宅の流通や改修はもちろんなること、古いビルなどの空間の転用でも、そこで展開されるライフスタイルに合った道具、インテリアを導入していく。居住者本位で住みこなせるシステムを、建築技術面でも、契約のあり方等の制度面でも組み立てていくことは大事なことでですね。



新しい居住文化を創出するために

谷 江戸時代は地方分権で、町内も小さな分権。町人が自分たちでなんとかやっていた。近代になり、役所ができる、苦情処理を行う政が受ける。公共投資もする。町のささやかな自治がどんどんお上頼りになる。戦後、地方自治が、もう一度、住民の手に戻ってきたけれど、そのときに、使いこなすだけの知恵の継承がなかったのは残念です。

弘本 そうした発想の中で都市計画もされてきたので、結局、地域が住民の町にならなかった。ミクロな生活を支える現代版の町式目がつくりあげられず、本当の意味の都市居住が形成されなかったという事です。

谷 逆にマンションになると、新たにいろいろな人が住んで、一からコミュニティづくりをやらせないといけない。そこで「マンション祭り」をしたりする。京都ではまだ地域の地蔵盆も残っていますが、大阪では、戦災を免れた長屋街など既存コミュニティが健在の地域以外では、人も集まらないからとやめてしまった。そこが問題で、今は逆に、どう復活させるかという状況になってきているのでは。

弘本 地域の伝統や文化は、一種のソーシャル・キャピタル(社会関係資本)ともいうべきもので、都市に住むための知恵の産物ともいえるものだと思います。なぜ、そうした文化的装置を人々は必要としてきたのかを読み解き直すことは、これからの居住政策やコミュニティ政策を構想するうえでも重要なことだと思います。そのエッセンスを、今後のコミュニティづくりにうまく使っていけたらと思いますね。もちろん、近世と現代は社会背景がまったく異なりますので、安易に考え過ぎてはいけません。近世に分権型社会のマネジメントを公共投資なしでやらないと仕方なかったように、現代社会も地方分権と財政難、行政機能の縮小と新たな公共システムが模索される時代

なっています。

谷 より効率的にするにはどうやるかという知恵と、自分の町に対する思いをそれぞれもって、限りある資源の中でうまくコミュニティを育てていくということです。

弘本 大阪は人口の流動性が激しい大都市としての特徴をもっています。その前提のもとに、ビジョンをどう描き、どう実現し、どういうかたちで知恵を発展的に継承していく仕組みをつくるのかですね。

谷 この「くらしの今昔館」でも、多くのボランティアに来てもらっています。その活動ぶりを見た方からは、いい意味で「まるで放任だ」とよく言われるんです(笑)。ある人は南京玉簾をする。お手玉をする。最近ではケンタマ名人や紙芝居屋さんも出てきました。皆さんわかつて動いて、誰も同じことをせず、自分のしたいことをやってみようという気持ちでいる。

弘本 魅力的な環境があれば人は動きだすですよ。大阪的な「イチビリ」(目だちたがり)といわれるものも、歴史を紐解けば創造的な都市環境の中から生まれてきたものだと思います。イチビリというのは、そもそも「市振り」から来ているといえます。つまり、都市的な華やぎを持った行動様式を指すわけですから。

谷 だったらそういう場所をたくさんつくる。町角でも広場でもいい。それを通して町の賑わいが出てくる。そして自分の町を見直してみよう。そういう活動から地域との相互関係がつかれないかとも思っています。これから、団塊の世代が一斉に町の中に出てきます。社会としての仕組みづくりが重要になってくるはずですよ。

弘本 従来、都心居住というと東京モデルにして考えることが多いのですが、東京の都心居住は政治的な求心力で成り立っている面もあります。そうではない「民」のつくる都心というものを考えていくときに、オルタナティブなモデルとして発信できるのは関西ではないかと思えますね。

谷 京都には生活文化がある種のレベルの高さである。一方、大阪ではかつての生活文化が失われています。今後、それを再生していくた

谷 直樹 (たに・なおき)

大阪くらしの今昔館
(大阪市立住まいのミュージアム)館長
大阪市立大学大学院生活科学研究科教授

1948年兵庫県生まれ。京都大学大学院工学研究科博士課程建築学専攻修了、工学博士。堺市博物館主任研究員、大阪市立大学講師、同助教授を経て現職。専攻は住文化史・博物館学。主な著書に、『まちに住まう 大阪都市住宅史』(共著、大阪都市協会)、『町家型集合住宅 成熟社会の都心居住へ』(共著、学芸出版)、『まち祇園祭すまい 都市祭礼の現代』(共編著、思文閣出版)、『町に住まう知恵 上方三都のライフスタイル』(平凡社)ほか。

弘本 由香里 (ひろもと・ゆかり)

大阪ガス エネルギー・文化研究所
客員研究員

1984年筑波大学芸術専門学群卒業。住宅建築専門誌「新住宅」編集員を経て92年より現職。研究領域は、生活者の視点からの住環境・まちづくり・文化政策など。98年から立命館大学政策科学部非常勤講師。98年から2年間、大阪市立住まい情報センター開設業務に就き、2000年から同センター非常勤総括企画員。主な著書に、『自治都市・大阪の創造』(共著、敬文堂)、『大阪 新・長屋暮らしのすすめ』(共著、創元社)ほか。



対談文中の写真はいずれも大阪くらしの今昔館にて撮影

めには、大阪は歴史に学ぶことをしないといけない。近代を再評価するだけでなく、近世も含めて再評価することが、大阪を複眼的に評価することになるんです。

弘本 ストックを循環させ、知恵をうまくつないでいくということでは、今、長屋の再生を試みている人たちは、ある種大阪的「市振りの感性が豊かですね。近世以来、民がつくってきた居住文化を、もう一度学びながら再生していく。そのときに、住民たちによる町式目の現代版を再構築したり、ストックを使い回したり、現代風にアレンジしていくことを続けながら、今の社会にマッチしたシステムをつくっていく。流動性の激しい都市の中にあつて、コミュニティの健全性と活力をどう両立させていくのかが、これからの社会の課題だと思

ます。

谷 市民社会としての歴史的経験が大きいのは大阪です。その意味で、町人社会の研究は過去の研究ではなく未来につながるものです。もちろん無批判に参照すべきものではありませんが、そこに、我々は何を汲み取っていくのかが問われていると思うのです。

弘本 大阪くらしの今昔館の開設時にもおっしゃっていたように、これまで都市計画や都市住宅の専門家は、海外の先進事例に範を求めがちでしたが、歴史的なパースペクティブの中で現代を捉えることがいかに重要であるか。都市に蓄積された有形無形の資源の価値に目を向けて、サステイナブルな社会を構想し、都市と居住をめぐめる問題に向き合っていく必要性を、改めて実感しているところです。今日はどうもありがとうございました。

CEL